

『春と修羅』第三集 「煙」に関する私註と考察

——煉瓦工場によせる心象を中心に——

木村東吉

一 はじめに

賢治の詩的イーハトーブ世界の構造と、その形成および変容過程を解明するための基礎作業の一つとして、本稿では、「第三集」の「煙」をとりあげて注釈し、考察してみたい。筆者は現在、この企図に従って、『春と修羅』第一集所収の作品を中心に注釈作業を進めつつあるが、「第一集」において、その重要性を増している北上川河畔詩群について見ていくと、「第三集」所収のこの作品も、関連するものとして浮かび上がってきたからである。注目される主な契機は、次のようなところにある。

この作品の最後において、煉瓦工場からの「黒いけむりがどんどんたつて／そらいつぱいの雲にもまぎれ／白金いろの天末も／だんだん狭くちぎまって行く」と描かれた情景は、『銀河鉄道の夜』における蝸の火について描かれた情景と類似する。また、この蝸の火の場面は、ケンタウル祭の夜、「青じろい雲がまるい環になつて后光のやうにかかつてゐる」⁽¹⁾ サウザンクロスの登場する直前にある。この点に関連して、『校本 宮沢賢治全集』によると、この「煙」は改作されて、文語詩「白金環の天末

を」になる。一方、この作品の一部と「七三一 黄いろな花もさき」とが融合されて、『春と修羅 詩稿補遺』所収の「西も東も」になり、さらに文語詩に改作されると未定稿「たゞかたくなのみをわぶる」になっているという。このうち、文語詩稿「白金環の天末を」では、「白金環の天末を、みなかみ遠くめぐらしつ、／大煙突はひさびさに、くろきけむりをあげにけり」と表現されている。これを見ても、両者の関連の深さを感じさせるところがある。『銀河鉄道の夜』と「煙」⁽²⁾とは、情景に夜と昼との違いはあるけれども、賢治の童話においては、地上の花と天の星との照応関係が指摘されたりしている。

澄明な空を背景とし、これを覆うようにまっくらな煙がたつ情景は、単なる情景としてのみならず、賢治童話の蝸からは悔悟する修羅のイメージが読み取られ、賢治詩における工場からは、しばしば社会化された近代的自我と通底する修羅のイメージが読み取られるから、その意味するところにも共通するものがある。⁽³⁾

この作品に対する先行研究には、小沢俊郎氏の「煉瓦工場」がある。⁽⁴⁾ 小沢氏は、「一ぺんすつかり破産した／煉瓦工場」とあるのを「負債整理

『春と修羅』第三集 「煙」に関する私註と考察（木村）

の手段である偽装破産でもあろうか」と推定し、ここに作者が「資本主義制度の下では当然のように行なわれている」「悪い」ものを捉えているとし、作者の社会に対する批判的姿勢を想定している。現実の会社については、そのような噂があつたのかもしれないが、賢治詩について見るかぎり、煉瓦工場の破産を、偽装倒産とする表現はなく、『校本 宮沢賢治全集』によつて明らかにされた創作過程をたどつて見ても、他者を一方的に批判するモチーフは認められない。この点については再考の余地があろう。

筆者は、作者が詩的作品において、この煉瓦工場に付与している心象の推移を参照しつつ、また、『校本 宮沢賢治全集』によつて明らかにされた創作過程をたどる形で、作者がこの作品に付与した心象を確かめ、作者の構想していたイーハトーブ世界形成の一端を明らかにしてみた。この場合、煉瓦工場の煙が、空を覆う黒雲と混じり合う存在として描かれていることに注目したい。作者の「昇天志向」と嫌人症との関係も見られるからである。

『校本 宮沢賢治全集』四巻に、『第三集』定稿として収録された作品は、次の通りである。

七四一 煙

一九二六・一〇・九・

川上の
煉瓦工場の煙突から

けむりが雲につゞいてゐる

あの脚もとにひろがつた

青じろい頁岩の盤で

尖つて長いくるみの化石をさがしたり

古いけもの足痕を

うすら濁つてつぶやく水のなかからとつたり

二夏のあひだ

実習のすんだ毎日の午后を

生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに

いま山山は四方にくらく

一ぺんすつかり破産した

煉瓦工場の煙突からは

何をたいてゐるのか

黒いけむりがごんごんたつて

そらいつぱいの雲にもまぎれ

白金いろの天末も

だんだん狭くちゞまつて行く

二 語句注釈

① 煉瓦工場・黒いけむり

「煉瓦」は、賢治の書きくせ。関連する全用例において、一貫している。同じ工場を、作者は「瓦工場」としたり、「練瓦会社」と表現したりする。

煉瓦工場は、稗貫郡花巻川口町にあった。

この作品で、「練瓦工場」は、L16にある通り、雲にまで達する「黒いけむり」を出す存在であるが、それは、「脚もとに」「青じろい頁岩」の盤がひろがっていることと、密接な関連がある。これが作者によって「修羅のなぎさ」とされた「イギリス海岸」を指すことは、容易に推定される。

この「イギリス海岸」を「脚もとに」控えて立つこの工場は、L13〜L15で「一ぺんすっかり破産し」たものとされるが、作者は今、これに「何をたいてあるのか」と、その内面に思いを寄せている。一度挫折を経験したものが「黒いけむり」をあげている姿に、作者の共感が寄せられているところが注目される。

その理由について少し考察してみれば、作者は、しばしばこの煉瓦工場を詩材に取り上げている。「冬のスケッチ 補遺」では、「小さき練瓦場に人は居ず／まるめるのにほいたゞよひ／火あかあかと燃えたり」とし、『第二集』の「鳥の遷移」「北上川は焚気をながしイ」では、この煉瓦工場をとりまく松林付近を、亡妹とし子の幻影が現われる場所とし、あるいは、異界に接するところのある、特殊な場所として捉えている。

『第三集』の「はるかな作業」の下書き稿「風と合唱」でも、「黒いけむりをわづかあげる／練瓦工場の向ふのはうで／沓え沓えとしてまたひゞくのは／組合倉庫の地堅めに／みんなてつくる合唱だ」と歌われ、「熟した雲やくわりんの匂／無色な風の一聯が／中略／交々こゝを通じて行けば」とつづけられている。果実の匂いを伴うところにも、「冬のスケッチ」以来共通したものがある。ちなみに言えば、詩作品ではないが、天沢退二郎氏の指摘にもあるように、童話「インドラの

『春と修羅』第三集 「煙」に関する私註と考察（木村）

網」においては、「まるめるに似たかほり」は「天の空間」の香りに通うものでもある。

また「はるかな作業」定稿では、この煉瓦工場の「向こう」の「台」で行われる共同作業は、遠目には「楽しく明るさうな」仕事に見えるけれども、「晩にはそこから忠一が／つかれて憤って帰ってくる」とあり、その理由として、小沢俊郎氏は、「一ぺんすっかり破産した／練瓦工場」とあるのを、「負債整理の手段としての偽装破産でもあろうか」と推定し、「資本主義制度の下では当然のように行われている」「悪どい話」と捉え、「黒いけむり」についても、「人間の不誠実を象徴する『黒い煙』としているが、作品の創作過程に即してみれば、そうとはいえない。

「はるかな作業」において、下書稿を参照して見ると、作業が行なわれているのは、「組合倉庫の地固め」のためのものであって、煉瓦工場においてではなく、そこから「沓え沓えとしてまたひゞくのは」「みんなてつくる合唱」であり、「つかれて憤って帰ってくる」忠一の怒りの理由としても、共同作業の中での不公平・不平等の問題が考えられる。その点については、作者自身も充分知っており、たとえば、共同作業中の不快さの問題を捉えた「饗宴」の制作日は、一九二六・九・三で、「はるかな作業」の制作日の、わずか一週間前である。

作品に即して見ても、作者の居る「この煙」を中心とする「こちら側の空間」とは「なにかちがった風の品種が鳴っている」「向う側の空間」で、共同作業が行われているのであり、そこは作者に、理想的な空間と見えている。下書稿の場合、この工場は「そらをうつつして空虚な川や／黒いけむりをわづかあげる／練瓦工場の向ふのはうで、

冴え冴えとしてまたひゞくのは」（傍点筆者）とあって、「黒いけむりをわづかにあげる／練瓦工場」は「そらをうつつして空虚な川」と一体のものとして、その「向う側の空間」とは別の、中間の空間を成している。したがって、忠一の労働と直接関係のない煉瓦工場の倒産に、あえて偽装倒産の「悪ど」さを想定してみても、これに忠一の「憤り」の理由を求めるのは無理がある。

定稿では、「向ふのはうで」が「うしろの台に」と改稿されて、忠一の作業している場所と川および工場を含む空間の分離が、幾分不明瞭になっている面はあるけれども、それだからといって、外見で共同作業が理想的に見える側面に変りはないのだから、煉瓦工場が資本主義体制の「悪どい」面を現わすとか、「黒いけむり」が「人間の不誠実を象徴する」とはいえまい。

もう一つの関連作品である『春と修羅 詩稿補遺』「西も東も」でも、「川上にやつと一きれ白い天末／そのこつちでは／広告に大きくこさえた／練瓦会社の煙突が幾日ぶりかで／黒い煙を吐いてゐる／（中略）／（四字さげ）（たゞ済まないと思ふばかり／（同前）どうして恨むことなどございましょう）／練瓦会社の煙突から／黒いけむりがのぼつて行つて／しづかに雨の雲にまぶれる」とあって、情景としては「煙」にもっと近似するが、ここにも、作者に社会批判の姿勢は見当たらない。

先にも引用した文語詩「白金環の天末を」では、

白金環の天末を、みなかみ遠くめぐらしつ、
大煙突はひさびさに、くろきけむりをあげにけり。

けむり停まるみぞれ雲、峽を覆ひてひくければ、
大工業の光景なりと、技師も出でたち仰ぎけり

とある。「西も東も」と合わせて見れば、いずれも強い自己顕示欲を示す工場に対する揶揄の姿勢は、あるいはあるかもしれないが、これに「悪どい」ものと捉えているとは、考えられない。

この点を確かめるため、「黒いけむり」ついて、その意味するところを、下書稿からの流れの中でたどっておきたい。「煙」の下書稿の九行目から、十七行目までは、次の通りである。

（八行目までは、改稿なし）

二夏のあひだ

生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに

いま山は四方にくらく

みんなはどこかの

まがりくねった樹に集つて

黒いりんごを落してゐれば

練瓦工場の煙突からは

何をたいしている「ともわからず削除」のか

黒いけむりがどんだんたつて

（以下、改稿なし）

これに対し、第一稿と同じ太さの鉛筆で次の手入れがなされているという。

L10の前に「ナシ↓」「ナシ↓毎日↓実習のすんだ」毎日「ナシ↓の」
午後「ナシ↓を」といった推敲を経て、一行を挿入し、

L10を生徒らと「たのしく↓むなしく↓たのしく」あそんで過ごした

「のに↓削除↓のに」「ナシ↓そのことは↓削除」と推敲し、

L12、13、14を削除して、かわりに、L15の前に「一ぺんすっかり破産した」の一句を付加して、定稿を得ているという。

賢治詩では、下書稿から定稿に至るまで、主題が常に一貫しているわけではないけれども、手入れの筆が第一稿と同じ太さの鉛筆であることも考慮すれば、おそらく同時期の改稿であろう。

そこで、この下書稿のL12、13、14には、「みんなはどこかの／まがりくねった樹に集って／黒いりんごを落してゐれば」とあり、これは「いま山は四方にくらく」を受けて、その内側の世界に具体的イメージを与えている。これが「生徒らと」「あそんで過ごした」ことを、「たのし」かったこととしながら、それが今から見ると「むなしく」も思われる。だからこそ、L10の推敲過程があったのであろう。

したがって「生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに」の「のに」には、その意が込められているはずであり、「黒いけむり」は、この「むなしく」を含蓄する形で「どんどんたつて」いたのである。この「むなし」さの内容については、次の雲の項、および、⑥の項で取り上げる「破産」の内容とも関連してくる。この点については第四節で、改めて考察する。

このように見てくると、この煉瓦工場の吐き出す「黒いけむり」には、幾分かの悔恨が含蓄されていることになる。ここには「銀河鉄道の夜」において、己の生き方の悔悟から「黒いけむり」をたてる蝸

『春と修羅』第三集 「煙」に関する私註と考察（木村）

火に近い心象が託されているのではあるまいか。⁽⁷⁾『銀河鉄道の夜』では、「楊の木や何かもまつ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のやうに赤く光りました。まったく向ふ岸の野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした」と描かれている。

② 雲

賢治詩においては、天象の表現が心象の全体的印象を反映することが多い。L17にもある通り、「そらいつぱいの雲」が広がり、これが「黒いけむり」とともにL18～19で「白金いろの天末」を「だんだん狭くちぢ」めていく存在であり、同時に地上から立ちのぼる黒い煙とまじわって一つになる存在である。作者の気持を暗くしていく黒雲である。しかしそれは、一方で、作者が雲について、次のような遍歴を経た後であることを、忘れてはならない。

『第二集』所収の「一九八 雲」で、作者は雲に向って呼びかけている。

いっしょうけんめいやつてきたといつても

ねごとみたいな

にぎりさけみたいなことだ

……ぬれた夜なかの焼きぼつ杭によっかかり……

おい きやうだい

へんじしてくれ

そのまつくるな雲のなから

自己の懸命な努力に対してさえ、厳しく問い直していればこそ発せられる声だが、むなしさの自覚を持つ声である。この徒労感の根底に、挫折感があることも見落とせない。この点にも注意しておきたい。

失意の時、作者が、雲にこうした親近感を寄せるのは、『詩ノート』所収「一〇三〇 あゆの雲がアットラクテヴだといふのかね」で、雲を次のように捉えていたことと無縁ではあるまい。

この野原の幾千のわかものたちの

うらがなくもなつかしいおもひが

すべてあの雲にかかつてゐるのだ

（中略）

それこそ恋愛自身なのである

また、これらを踏まえた形で、『疾中』の「その恐ろしい黒雲が」において、「その恐ろしい黒雲が／またわたしをとらうとくれれば／わたしは切なく熱くひとりもだえる」というが、そこには、作者自身の、アンビヴァレンツな心情があった。作者は、まず、次のようにいう。

北上の河谷を覆ふ

あの雨雲と婚すると云ひ

森と野原をこもこも載せた

その洪積の大地を恋ふと

なかばは戯れに人にも寄せ

なかばは氣を負ってほんたうにさうも思ひ

作者には、「雨雲と婚する」気持ちさえあったのである。「天の微塵とちらばらう」という意識に通じるものであろう。にもかかわらず、いざ、その黒雲が「またまのあたりに近づけば」「あゝ父母よ弟よ／あらゆる恩顧や好意の後に／どうしてわたくしは／その恐ろしい黒雲に／からだを投げることができやう」と思ってしまうのである。

黒雲にまじわる煙に、作者が内面の挫折感を噛みしめての希願を込め、自身の影を捉えていたのは、これを見ても明らかであろう。挫折感の内容については、後にもう一度改めて考えたい。

③ 青白い頁岩・尖つて長いくるみ・古いけもの足痕

頁岩（ケツガン）は地質学用語で泥板岩の一種。粘土が凝固して出来たもので、やわらかく板状をなす。賢治がイギリス海岸と名づけた北上川の河岸やその付近の川底には、この岩が露出している。

賢治はこのイギリス海岸について、「イギリス海岸の歌」で、次のように歌っている。

Tertiary the younger tertiary the younger

Tertiary the younger mud ston

あをじろ日破れ あをじろ日破れ

あをじろ日破れにおれのかげ

Tertiary the younger tertiary the younger

Tertiary the younger mud ston

なみはあをぎめ支流はそそぎ

たしかにここは修羅のなぎさ

同時に作者の体験に基づくと見られる童話『イギリス海岸』には、「ある時私たちは四十近くの半分炭化したくるみの実を拾ひました。それは長さが二寸位、幅が一寸ぐらゐ、非常に細長く尖った形でしたので、はじめは私どもは上の重い地層に押し潰されたのだらうとも思ひましたが、縦に埋まつてゐるのもありましたし、やっぱりはじめからそんな形だと思はれませんでした」と描き、また、「白い火山灰層のひとつところが、平らに水で剥がされて、浅い幅の広い谷のやうになつてゐましたが、その底に二つづつの蹄の痕のある大きき五寸ばかりの足あとが、幾つか続いたりぐるつとまはつたり、大きいや小さいのや、実にめちやくちやについてゐるではありませんか。その中には薄く酸化鉄が沈澱してあたりの岩から実にはつきりしてゐました。たしかに足痕が泥につくや否や、火山灰がやつて来てそれをそのまゝ保存したのです」と描いている。

『校本 宮沢賢治全集』第十四巻の年譜では、『イギリス海岸』を一九二二年八月九日の成立とする。また、作中では、足痕の化石を発見し、翌日これを発掘したのを「昨日のことです」としている。年譜の大正二四（一九二五）年一月二三日の項では、作者の発見したバタグルミの化石について、東北大学地質古生物教室の早坂一郎教授の調査に協力した旨が記されている。

作者が自分の過去の甘さを責め、楽しかったこと、美しいものを見ていたものについてさえ、そのような捉え方をしていたことに自省的言辭を示すのは、『第二集』の「雲」でも見たし、序にも見える。また、「水は水銀で／風はかむばしいかほりを持つてくると／さういふ型の考へ方も／やっぱり鬼神の範疇である」（二〇六 日はトパーズのか

【春と修羅】第三集 「煙」に関する私註と考察（木村）

けらをそゝぎ」といった形で示したものもある。このように深化した修羅意識をもつてすれば、かつての楽しかった思い出も、悔恨の対象となつて不思議はない。

これを受けて『第三集』になると、「黄いろな花もさき」で「川はあすこの瀬のところ／毎秒九噸の針をながす」と表現し、先に見た『銀河鉄道の夜』（初期形）でも、川波の光を「針」としていた。

④ 二夏のあひだ

賢治が県立花巻農学校（一九二三年三月までは稗貫郡郡立）に勤務したのは、一九二二年二月三日から一九二六年三月三日までであるから、夏は四回経ているはずである。このため表現の意図が、多少付度される。作者の伝記的事実との照合をあまり重視することには疑問なしとしないが、あえて伝記的事実に即して、意を汲んでみれば、一九二三年の夏は青森・北海道經由の樺太旅行をしているし、一九二五年の夏には、すでに翌年の退職を決意していたから、「実習のすんだ毎日の午後を／生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに」と表現するに相応しい夏は、「二夏のあひだ」だったのかもしれない。

⑤ 生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに

作者は『第二集』の序に「わたくしは毎日わづか二時間乃至四時間のおかるい授業と／二時間ぐらゐの軽い実習をもつて／わたくしにとっては相当の量の俸給を保證されて居りました」と述べている。また「生徒らとたのしくあそんで過ごした」「実習のすんだ毎日の午後」の様子を描いた童話に『イギリス海岸』があることは、前項で述べた。

この部分を読むにあたっては、「生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに」の「のに」に、多様な逆説関係を複合させながら、解釈がなさ

れなくてはならない。一つには、過去においては「生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに」、「いま山山は四方にくら」いという自覚である。二つには、過去においては、「生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに」、それを今から思えば「青じろい頁岩の盤」や「うすら濁ってつぶやく水のなか」でのことであつたという自覚である。三つには、過去においては「生徒らとたのしくあそんで過ごしたのに」、現在の自分は煉瓦工場と同様に「黒いけむり」をどどん立立てている存在だという自覚である。

⑥ 一つペンすつかり破産した

小沢俊郎氏が指摘する偽装破産であつたかどうかとは別に、一度挫折を経験したものをあえて取り上げて、同情を寄せているのが注目される。「何をたいてゐるのか」という表現には、批難や懐疑の意ではなく、同情と共感が読み取れよう。ただ、このように理解する場合、工場の「破産」と再生の「黒いけむり」を見て、そこに作者が自身の姿を捉えていたとすれば、作者の内部で体験されていた挫折とはどのようなものであつたかが問題になるのだが、この点は第四節で考えた
い。

⑦ 白金いろの天末

「汽車は触媒の白金を噴いて」（「清明どきの駅長」）といった比喻を用いる作者であるから、白く輝く雲を表現したものであるが、それと同時に、文語詩に改稿された場合、「白金環の天末を、みなかみ遠くめぐらしつ、」となるのを考慮するならば、「日さへまもなくかくされる／かくされる前には感応により／かくされた后には威神力により／まばゆい白金環ができるのだ／（二字さげ）（ナモサダルマブフンダリ

カサストラ」（「樺大鉄道」といった表現があることは、白金環の実態を知るうえで、また作者がこれに託している心象を知るうえで参考になる。」「（二字下げ）どうだ雲が地平線にすれすれで／そこに一寸じ白金環さへつくつてゐる」（「一七 丘陵地を過ぎる」『第二集』収）といった表現も見られる。「白金いろの天末」に、作者が最終的に祈念するものが、表象されているのであろう。

三 構成

A L1〜3

川上に向つて見ると、遠く煉瓦工場から煙がのぼつて、それが雲ま
でつづいている情景。作品世界の空間的設定がなされている。

B L4〜11

Aに触発され、作者の回想・想念が展開される。視線が遠くを望む
ことと、思いが遠い過去に向うことが呼応している。工場の脚下に、
修羅のなぎさともいえる川原が広がっていることを思い、そこで作者
自身が、かつては「二夏のあひだ」教師として楽しい生活を体験した
ことを思い起こし、それとともに、その時はそれとして楽しい経験で
あつたものが、今から思えば、その体験も「青じろい頁岩の盤」の上
でのことであり、「うすら濁ってつぶやく水のなか」でのことであつた
と自覚される。この修羅としての自己の自覚からする共感が、「黒いけ
むり」をあげる煉瓦工場に注目させ、また、「白金いろの天末」を狭め
ていく雲と混じり合うけむりを凝視させるのである。

C L12〜19

A、Bを踏まえて、現在の自分の周囲の状況が、そして自分自身のこと、振り返られる。現在の周囲の状況は、明るく楽しかった過去に比べて暗澹としているが、それを思えば、過去の挫折の体験が思い起こされ、脚下に修羅のなごさを控えて立つ工場は、けっして作者と別のものではない。その工場では、今なにをたいているのであろうか、黒いけむりを立て、それがそのまま空の雲にまぎれていく姿に、作者は自己の志向の一面を見る。が、その雲は、作者の志向の一面でありながら、空の一角にのみ残る白金いろの輝きさえ、覆い隠してしまいうさだというのである。複雑に屈折して、苦渋に満ちた作者の心情が、伝わって来る作品である。

『春と修羅』第三集の二番めに収められた「七〇九 春」（制作日付一九二六・五・二・）において、作者は陽が照って鳥が啼き／あちこちの檜の林も、／けむるとき／ぎちぎちと鳴る 汚い掌を、おれはこれからもつことになる」と、一種の覚悟を述べたのであったが、それは、半年後の「七四一 煙」において、かつては思いもかけなかった程に大きく展開されたというべきかもしれない。「七〇九 春」の「ぎちぎちと鳴る汚い掌」は、あくまで明るい陽光の下でのものと想定されているけれども、「煙」の「黒いけむり」は、「そらいつぱいの雲に」まぎれつつ、「白金いろの天末」さえ「だんだん狭くちぢ」めていくからである。

では、黒い煙に修羅の表象と志向の投影を見、天上の雲とのまじわりを想定しつつ、同時にこれを「白金いろの天末」を覆うものと自覚するのは、どのような経緯によるのであろうか。次節では、この点に関して、関連作品も含めて考察してみたい。

『春と修羅』第三集 「煙」に関する私註と考察（木村）

四 嫌人症と「昇天志向」

語句注釈の中でも多少ふれたが、「煙」との関連作品として、「西も東も」がある。煙と悔恨の心象との関係を見るうえで興味深い作品なので、以下、この作品について見ておきたい。主題の重点の置き方に違いはあるが、素材的には、「煙」とほぼ同じ場面が取り上げられている。『春と修羅 詩稿補遺』収録の定稿は、次の通りである。

「西も東も」

西も東も

山の脚まで雲が澱んで
野はらへ暗い蓋をした

……レーキは削るぢしぱり、ぢしぱり、ぢしぱり

5

川上をやつと一きれ白い天末
そのこつちでは

広告に大きくこさえた

練瓦会社の煙突が 幾日ぶりかで

黒い煙を吐いてゐる

10

……ぢしぱりもいま、

やっぱり冬にはいらうとして

緑や苹果青や紅、紫、

あらゆる色彩を支度する

それをがりがり削いてとる……

15

もすが一むれ溯ってくる

矢羽をそらでたゝいてゐて

足ぶみをするやうなのは

岸の小松か何かの中へ

おりたいともいふのだらう

20

（たゞ濟まないと思ふばかり

どうしても恨むことなどございませう）

練瓦^{マツ}会社の煙突から

黒いけむりがのぼって行つて

しづかに雨の雲にまぶれる

25

おおざっぱにいつて、行下げのない部分は、作者が視線を上げて捉えた情景であり、行下げをしている部分は、作者が視線をさげて、農作業をしながら捉えた情景になっている。また、それに対応して、行下げのない部分では周囲の情景を捉えてこれに心象を仮託し、行下げをしている部分は、これに対して内攻する作者の心象が仮託されている。

L16の「もず」は、むくどりのことらしいが、作者は、しばしば、この「もず」に、錯綜する自己の心情を託している。L11〜14の「ちしばり」の「あらゆる色彩」と呼応しつつ、作者の胸に込み上げてくるものを表象しているのだろうか。これを受ける形で書かれた、行下げをして（一）で包んだL21〜22には、作者の心情が直接的に表出されているが、それも、「もず」の「岸の小松か何かの中へ／おりたいともいふのだらう」と見られた動きを受けている。

しかし、この作品で注目されるのは、その時の「たゞ濟まないと思ふばかり／どうしても恨むことなどございませう」と、自省し自己を抑制するのと呼応して、かえって逆に作者の目は、反転して、静かに「雲にまぶれる」「黒いけむり」を凝視していることである。かつて、人間関係において何かの出来事があつて、それが今、作者の中でさまざまに思い返されている。「どうしても恨むことなどございませう」というからには、作者が恨みに思うこともあり得る人間関係が過去にあつたのであろう。これを自制して、「たゞ濟まないと思ふばかり」といった時、「黒いけむりがのぼって行」く姿に目が引きつけられるのである。

このような恨みとそれに対する自制を契機とする「昇天志向」は、賢治作品の主題にいくつも見られるもので、『よたかの星』のよたかにも、『銀河鉄道の夜』のジョバンニにも見られることである。ただ、この作品では、この天上的なものへの転化を、そのまま自己救済に結びつけていないところに、昇華し切れないものがあるわけだが、『よたかの星』のように、「昇天志向」を美化しただけ、厳しい自己認識がひそめられているともいえる。

では、作者が恨みに思つても自然な人間関係とは、どのようなものであつたのだろうか。実生活上の具体的なことは、今の筆者に不明だが、詩的作品をなぞつただけでも、関連するモチーフを持つ作品は幾つか見出される。嫌人^{ミヤシロベ}症を扱った作品がそれである。

その一つとして、一九二五・二・五の制作日付を持つ「四〇九冬」がある。これには、「がらにもない商略なんぞたてやうとしたから／そんな嫌人^{ミヤシロベ}症にとつつかまつたんだ」云々と記しているし、天沢退二郎氏の指摘がすでにあるように、一九二五・二・一九日付森佐一氏宛書簡（書

簡番号二〇二)にも「いま Misanthropy が氷のやうにわたくしを襲つてゐます」と記されているから、現実的にも何かがあったのかもしれない。これに先立つて、一九二四・四・一九の創作日付を持つ「いま来た角に」の下書稿(二)および(三)の手入稿には、この夜間行を素材とした作品において、夜間行の契機が花巻農学校の校長や同僚との間の問題であつたらしいことをほのめかしている⁽⁹⁾。

ちなみに云えば、「四〇九 冬」において、作者は「いっばいあかりを載せて電車がくる」のを凝視しているし、同じ作品番号を持つ、「四〇九 今日もまたしやうがないな」には、「まるでわれわれ職員が／タイタニツクの甲板で／Nearer my god か何かうたう悲壯な船客まがひである」といった表現が見られる。「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニの天上への旅の底流にも、疎外感と嫌人症(シンドロイ)の感情があつたのを考慮すれば、ここにもモティーフの近接関係が認められよう。

そして、この嫌人症(シンドロイ)は、一時的なものではなかつたようで、『春と修羅 詩稿補遺』所収の「心象スケッチ／林中乱思」では、農学校退職後の作品であるのに、「白菜をまいて／金もうけの方はどうですかなどと云つてゐた／普藤なんぞをつれて来て／この塩汁をぶっかけてやりたい／誰かのろろ農学校の教師などして／一人前の仕事をしたと云はれるか／それがつらいと云ふのなら／ぜんたいじぶんが低能なのだ」とさえいつている。

先述の通り、「西も東も」は、文語詩の未定稿「たゞかたくなのみをわぶる」に改稿されるのだが、それは次のようなものである。

……たゞかたくなのみをわぶる

【春と修羅】第三集 「煙」に関する私註と考察(木村)

なにをかひとにうらむべき……

ましろきそらにはゞたきて
ましろきそらにたゆたひて
百舌はいこひをおもふらし

未定稿としての保留条件はつけなくてはならないが、この部分を見ただけでも、百舌の「はゞたき」と「たゆたひ」を見つめ、「いこひをおもふ」姿を捉える作者の心の根底に、「ひとにうらむ」思いを持つ自己の「かたくな」を「わぶる」緊張感は、明らかに持続されている。

「煙」が、こうした作品群の中の一編であることを確かめて見れば、煉瓦工場とそれのたてる「黒いけむり」は、けつして作者と別のものになつたのである。

註1 拙稿『春と修羅』第二集私註と考察(その一)では「空明と傷痕」(『島大國文』第16号 昭62・11)を、(その二)では「雑露青」(『島根大学教育学部紀要』人文・社会科学)第21巻 昭62・12)を、(その三)では「北上川は焚気をながし」(『島根大学教育学部紀要』人文・社会科学)第22巻―第1号昭63・10)を、(その四)では「一八四 春」(『島根大学教育学部紀要』人文・社会科学)第22巻―第2号昭63・12)を取り上げた。参照していただければ幸甚である。

2 天沢退二郎『宮沢賢治』(昭61・9、筑摩書房刊)「宮沢賢治と『星』の章、参照。

3 拙稿『春と修羅』第二集私註と考察(その一)「空明と傷痕」(『島

『春と修羅』第三集 「煙」に関する私註と考察（木村）

- 大国文」第16号 昭62・11）参照。
- 4 小沢俊郎『宮沢賢治論集 2 口語詩研究』（昭62・4、有精堂出版刊）「煉瓦工場」の章、参照。
- 5 拙稿『春と修羅』第二集私註と考察（その三）「北上川は焚気をながしィ」（島根大学教育学部紀要〈人文・社会科学〉）第22巻―第1号昭63・10）参照。なお、この前稿では、煉瓦工場に対して抱いていた作者の心象が、『第二集』までと『第三集』以下とで変化していたのであるが、これを本稿の通り改めたい。
- 6 天沢退二郎『宮沢賢治』鑑』（昭61・9、筑摩書房刊）「ブルー・ストと宮沢賢治」の章に、この点についての指摘がある。
- 7 佐藤泰正『空明と傷痕』『一本木野』（佐藤泰正編『宮沢賢治必携』昭56・3、学燈社刊収）参照。
- 8 賢治作品に登場する「もぐ」「百舌」は、群をなして飛ぶなど、普通のモズと生態を異にする。日本野鳥の会の森下英美子氏のご教示によると、賢治童話『鳥をとるやなぎ』等に見られる「モズ」は、「ムクドリではないか」とのことであった。なお、東北方言では、モクドリのことを「もぐ」「もく」ともいうようである。
- 9 天沢退二郎『宮沢賢治』鑑』（昭61・9、筑摩書房刊）「宮沢賢治の嫌人症」の、章参照。